

○彼岸花ゆるぎなき線描きおり

富子

○とりあえず秋色纏まとい立ちあがる

秋思にはヘルマン・ヘッセ読んでみる

美貴

○密集はならねど土手の曼珠沙華

千代

独り居の右に左に秋思かな

山里の静けさ深め法師蟬

夕子

闇照らす絵金の絵筆曼殊沙華

掛時計ネジのゆるびし秋思かな

爽やかやボール見つめる打席の子

弘

○寝転んでひいふうみいよ鳥渡る

○頬杖をつけば秋思と思われる

文子

亡父母の夢は淋しい彼岸花

万貴

○秋思かな納経帳に朱を重ね

芋の蔓一年前から台所

ちよつと高し小振りの秋刀魚焦しおり

丞子

一時帰宅の亡師の枕辺つくつくし

地球にコロナ群がる彼岸花

さえ

初江

一服の抹茶馥郁ふいくたる秋思

○彼岸花棚田に空の広がりぬ

時刻表持たぬままにて秋の旅

身に入むや白紙にありてペンの影

郁子

○吾亦紅風に音符が唱い出し

富江

○秋暑し補聴器の管白濁くたす

透析の兄生きる術里の秋

秋懷の終着駅はコロナかも

村の鍛冶屋朽ちて看板秋の蝶

酔花

○詫びつつもマムシを殺す山暮らし

○ためらいも無く旅立つか鳳仙花

草刈りし畦にすくつと彼岸花

志津子

ゆの

○さつと来てさつと帰るか彼岸花

ミルク猫抱いた目力庭のすみ

蜘蛛の糸信じた先に君がいた

一枝

○曼珠沙華小径辿れば先祖墓

秋思いま日本列島へそ辺り

曼珠沙華はやぶさ2は宇宙行

隣りより届く湯気上ぐ栗の飯

空の紺余白残して秋桜

ときめきし畦に燃えにし曼珠沙華

味元 昭次 作品

秋思老人に浄土への道尋ききにゆく

誰も笑わぬ駄洒落を一つ秋さびし

電話置きしばし秋思の老社員

